

---

# シンデレラ奇想譚

森乃きのこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

シンデレラ奇想譚

### 【Nコード】

N1774I

### 【作者名】

森乃きのこ

### 【あらすじ】

シンデレラと呼ばれた少女と、その義姉のお話。  
本当の灰かぶりは、いったい誰…？

## 前編（前書き）

以前、ムーンライトノベルの方で投稿した作品です。R18ではないな…と思ったので、R15として再投稿です。内容は、変わりませんのでご注意ください。

## 前編

昔、昔。

あるところにリーリアという美しい少女がいました。

真っ白な肌に苺のように赤く、ぷつくりとした唇。

くりっとした大きな瞳は、まるで空を映したかのような美しい青。

髪はお母様譲りの見事なブロード。

美しく愛らしい少女は、誰からも愛され、そして慈しまれて育ってまいりました。

でもある時から、少女は不幸の渦に飲み込まれてしまうのです。

リーリアが大好きなお母様が、病の為に亡くなってしまふのです。

リーリアは、大変悲しみました。その嘆きように、お父様も困ってしまうほどでした。

お母様がお亡くなりになった翌年、お父様は思い切って貴族の中から一人の女性を妻に迎えました。

その女性は、子爵家の娘でお父様と同じように夫を病気で亡くして出戻っていたのです。

お父様の再婚に、リーリアはたいそう喜びました。

お母様が出来るだけでなく、お姉様まで出来たのですから。

こうして、リーリアの家族は増え、楽しく暮らしていけるはずでした。

ですがお父様が再婚した翌年、お父様は不幸にも事故で亡くなってしまうのです。

乗馬の最中でした。公爵であるお父様は、国王陛下の幼馴染でもあり、よく一緒に狩りに出掛けたりしてい

たのですが、今回も森に増えすぎた狐を狩りに馬で出掛けたのです。ところが突然馬が暴れだし、お父様は地面に叩きつけられる様にし、振り落とされ、運悪く頭を打ち、

亡くなってしまわれたのです。これには、国王陛下もお嘆きになり、リーリア家族に多大なお金を差し出しました。今まで働いてくれた礼と、一緒に居たのに救えなかった慰

謝料。

それは、贅沢さえしなければ何年かは、働かなくても暮らしている程の額でした。

リーリアは、跡継ぎとして育てられたので、お父様のお仕事を継ぎましたが、慣れていません。

慣れるまでは、このお金で暮らし、贅沢は避けようとお義母様とお義姉様たちに進言しました。

が、お義母様たちは、リーリアの言うことを聞いてはくれませんが、国王陛下からいただいたお金で、ドレスや宝石を買い漁り、あつという間に散財してしまつたのです。

そしてお義母様は、リーリアの仕事を取り上げ、今までの仕事の代わりに家事仕事を言いつけました。

領民から多額の税金を取り、お母様たちの暮らしぶりは、益々派手になっていくのと同時に、リーリアは、どんどんみすばらしくなっていきます。

リーリアは、灰に塗れても泥に塗れても、何時かお義母様たちが目を覚ましてくれる日を待ち望んでいました。でもそんな日は、幾ら待っても来ず、リーリアは何時しか「シンデレラ（灰かぶり）」と呼ばれるようになったのでした。今日も、義母と義姉によるシンデレラ虐めは苛烈を極めます。

リーリアは、決して泣かずに耐えて耐えて耐え抜きます。

何時しか、また……家族で仲良く暮らせる日を夢見て。

「シンデレラ奇想譚 前編」

シンデレラの二番目の義姉、フェリシアは、怯えていた。いつもいつも、怯えていた。

母が、姉が、シンデレラを虐めるたびに、手が震え、身体が震え、奥歯がガチガチと鳴ってしまうほどに怯えていた。身体の内側からやって来る恐怖に怯え、ただただ、母と姉の後ろに隠れていた。

フェリシアは、怖かったのだ。自分がしていること、母のしていること、姉のしていることが、怖くて怖くてたまらなかったのだ。

母と姉は、シンデレラを甚振る。

美しい容姿に美しい心を併せ持つシンデレラこと、リーリア。容姿が美しいというだけで、母と姉の怒りを買ひ、虐められるシンデレラに、フェリシアは同情していた。

ああ、可哀想に。そう思っていた。そう思っているだけで、無関係で居られたら良かった。

だがある日「フェリシア、お前もリーリアにきついお仕置きをするのです」と母に言われ、断ることも出来

ず、仕方なく廊下に泥だらけの猫を放し、震える声でシンデレラに廊下掃除を命じた。

その時のシンデレラの悲しそうな顔に、フェリシアは、胃が重くなるのを感じた。

まるで、胃の中に大きな石を飲み込んでしまったような、重苦しい感覚。

もうこれきりにしよう、一度でもやれば、母と姉に義理は立つ。これからは、無関係でいよう。元来、臆病者のフェリシアにとって、人を虐めるというのはストレスでしかなかったのだ。

だが、母も姉も怖い。もしシンデレラを虐めなければ、今度は自分に向かってくるのではないかと思うとどうしても断れない。

フェリシアは、なるべく自分に火の粉が降りかからないように、せめて自分だけは平穩に暮らせるように、

ただただ身を小さくして過ごすばかりだった。

シンデレラ虐めには、なんとか加わらずにいたが、今度はフェリシアに孤独が訪れた。

シンデレラを助けるわけにもいかず、かといって母と姉に手を貸すわけにも行かず。

ただただ一人で寂しく、寂寞の日々を送ることになったのだった。

本を読むことが好きなフェリシアは、母と姉とシンデレラ、そして寂しさから逃げるために、王立図書館に逃げ込む。王国が作った図書館で、基本的には一般市民も利用可能だ。

一般市民に貸し出しは出来ないが、貴族は貸し出しも出来るシステムだが、フェリシアは貸し出しをせず

に一人静かに、図書館の隅で椅子に座り、本を読む。

家に帰れば、またシンデレラ虐めを強要される。

母と姉に、シンデレラを虐めるのです、虐めて追い出して、この公爵家に乗っ取るのですと言われるに違いないから、帰りたくない。

シンデレラの継母でありフェリシアの実母は、それはたいそう強欲

な人で、最初に嫁いだのは伯爵家。

子爵令嬢だったフェリシアの母は、伯爵家へ嫁いだものの、夫の出世欲の無さに辟易としていた。

どうせならもつと上の、そう、侯爵か公爵へと嫁ぐのだったと後悔していた矢先に、夫が病で死んでしま

い、これ幸いとさっさと娘二人を連れて実家へと戻ったのだった。

母は、夫が死んだのと同時に実家へと戻って直ぐ公爵家へ嫁ぐという幸運を手に入れて更に強欲になってし

まった。それでも、元からそんな酷い人間ではなかった。その頃の母を知っているだけに、フェリシアは、

悲しくて仕方なかったのだ。

「……お母様……昔はあんな方ではなかったのに……」

お姉様だつて、わたくしを可愛がってくださつて……」

嘆いても、昔が戻ってくるわけではない。でも嘆かずには、涙を流さずにはいられなかったのだ。

フェリシアの琥珀の瞳から、ぽろりと涙が零れ落ちる。

すると、すうっとフェリシアにハンカチが差し出された。びっくりして、フェリシアはパツと顔を上げた。

一人の男性が目に入り、同時にハンカチを差し出しているのはこの人だと認識する。

ハンカチは、シンデレラの瞳と同じ空色。

その色を見て、フェリシアは更に瞳に涙を溢れさせました。罪悪感で、心がいっぱいになってしまったのです。

「ああ、申し訳ない

そんなに泣かないで、レディ」

「も、申し訳ありません……お見苦しいところを……」

「泣くほど感動した本でしたか？」

「……い、いいえ……そういう……わけでは……」

突然話しかけてきた男性に驚き顔を上げると、男性は手にしたハンカチで、フェリシアの涙を優しく拭う。

そんなことをされるのは、勿論初めてのことで、フェリシアの頬は真っ赤に染まった。

「では、どうされたのですか？あなたのように美しい女性が涙を流す姿は、誠に絵になり美しいのですが、

やはり涙よりは笑顔でいてくれた方が男としては嬉しいものです  
涙のわけを、教えて頂くわけには参りませんか？」

「……わ、わたくし……」

「決して他言はいたしません。その辛い胸の内を、吐き出してしま  
いなさい」

フェリシアの心は弱い。シンデレラのように、虐められても真っ直  
ぐに前を向けるような、そんな心の強さ

は、持ち合わせてはいない。強者の影にびくびくと怯えながら隠れ  
ているしか、フェリシアには出来ない。

だからこそ、手を差し伸べてくれる誰かがいれば、その誘惑には勝  
てないのだ。

止まらぬ涙をハンカチで拭いながらフェリシアは、ついに見知らぬ  
男性に己の胸の内を吐露してしまった。

フェリシアは、臆病で弱虫で泣き虫で、自分の内に大きなストレス  
の元を溜めておけるような度量はないに

等しい。こうして見知らぬ男性に胸の内を話してしまうのは、当然の結果だったと言えた。

「そう……それは辛かったね」

「わ、わたくし……本当はリーリアを可愛がって差し上げたいのに……っ

お姉様がわたくしを可愛がって下さったように、大事にして差し上げたいのにつ！

怖くて……怖くて……」

「人間、誰しも臆病な生き物さ……きつと、君の妹君を救えるのは、たった一人なのかもしれないな」

「……リーリアを救う手立てがあるのですか？」

「そうだね……これを、君にあげよう」

「これは……？」

男性は、一通の封筒をフェリシアに渡した。しげしげとそれを眺めるフェリシア。

宛名は、書いておらず封筒の表は無地のまま。ひらりと裏返してみると、封蝋が押されていた。

フェリシアは、その封蝋の家紋を見て驚いた。それは紛れもなく、王家の紋章。

向かい合う獅子、そして手前には天秤。力と平等を象ったそれは、間違いなく王家から出された封筒だった。

た。驚いて男性を見上げる。もう、涙は出ていなかった。それどころか、驚きで涙は引っ込んでしまった。

「う、う、これは……！」

「これは、一週間後に行われる舞踏会の招待状だよ

君の家は公爵家だろう？必ず招待状が来るはずだ、勿論、人数分でも君の話が本当なら、君の母上と姉上は、リーリア嬢には招待状を渡しはしないだろう

だから、これは君からリーリア嬢に届けるんだ、必ず怖くても頑張れるね？」

男性の言葉に、フェリシアは中々頷く事が出来なかった。

何度も言うが、フェリシアは臆病者だ。母や姉を畏れてリーリアを虐めてしまうぐらいだ。

母に隠れて、姉に気付かれないように、こっそりとリーリアに接触することなど彼女には到底無理だ。

何か大きな事をやろうと思えば、挙動不審になってしまい、挙動不審の理由を尋ねられれば隠しておく事など出来るはずがない。

姉になれば、何とか誤魔化しが効くかもしれない。だが、もっと苦手な母に問い詰められたら吐いてしま

うだろうことは、目に見えていた。

でもフェリシアは、今後の自分の安寧を計るという目的の為に、勇気を振り絞って男性に頷いて見せた。

男性は、その様子にニツコリと微笑んだ。

「ああ、私はランドルフと言います

事情により家名は申し上げられませんが、決して怪しい者ではありません」

「あ……わ、わたくし、フェリシアです

フェリシア・グレイバーク……」

「ええ、存じていますよ……あなた方は宮廷でもとても有名だから」

「……な、成り上がりだと言われているのでしょうか？」

お義父様をお母様が殺したに違いないとか……色々言われているのは、わたくしも知っています……」

「今更、過去を問い詰めたところでせん無い事だ

私はそんなことは、気にしない、あなたも気にしないことだ」

それから男性と別れ、フェリシアは薬屋に寄り、手荒れの薬を買ってから自宅に戻った。

自宅に戻り、リーリアを探していると、裏庭で今にも姉に鞭打ちされそうになっているリーリアを見つけ、

フェリシアは慌てた。もし鞭打ちでもされようものなら、身体に痕がつく。

身体に痕がつけば、夜会用の派手に背中や胸の開いたドレスは、着れなくなってしまう。

フェリシアは、必死に姉を止めた。

もしかしたら、初めて姉に対して反抗心を抱いたかもしれない。

「お姉様！」

「あらフェリシア、何処へ行っていたの？」

「街に……それよりもお姉様、お姉様のお手を煩わせるなど以ての外リーリアへの置ききは、わたくしがしますわ」

「そう？丁度良かったわ、これからお母様と宝石を買いに行こうと

思っていたの

出入りの商人では、いいものが無かったのよね」

「リーリア、お姉様に代わってわたくしが折檻いたします

こちらへいらつしゃい！」

リーリアは、何時もは干渉してこない二番目の姉が自分に干渉してくることに疑問を持ちながらも、これから何をされるのかと思うと、顔を青くさせ、身を震わせた。

フェリシアは、リーリアの腕を引き、物置小屋にその身体を押し込めた。

そして大きく手を振りかざす。

「いけない子、お姉様のお手を煩わせる悪い娘は、こうしてくれるわ！」

「っ！」

リーリアは目を瞑った。

パシンッ！

乾いた音がした。確かに、皮膚を叩く、聞きなれた音がしたはずなのに、リーリアの身体はどこも痛みを訴

えなかった。フェリシアは、もう一度手を振りかざし、またその手を振り下ろした。

パシンッ！

確かに音がしているのに、リーリアは、自分に痛みが襲ってこない

ことを不思議に思い、恐る恐る目を開い

た。そこには、自分の腕を叩く二番目の姉の姿があった。

一箇所を叩き続けると、赤く腫れ上がってしまっで見つかった時に困るから、赤くならないように反対の腕

を叩いたり、足を叩いたり、とにかく音が派手に聞こえるようにフェリシアは自分の身体を叩いた。

しばらく同じ事を繰り返し、フェリシアはそつと外の様子を見ると馬車に乗りでか

けていく姉と母を見てホツとした。

「お……お義姉様……？」

「リーリア……あ、あの……い、今まで助けられなくて……その……ご、ごめんなさい」

「……お義姉様……」

「あ、あなたに何度も意地悪してしまっただわ、許してくれなくてもいいの

ただ、わたくしの気持ちを知っていてほしくて……」

「お義姉様、お辛かったでしょう？わたくしのために、さぞお辛かったでしょう？」

「ご自分の身体を痛めつけてまで守ってくださるなんて……」

リーリアは、目頭が熱くなり、我慢できずにぼろぼろと涙を零しながら、ボロボロの手でフェリシアの手を

掴んだ。この人は、本当はこんなにも優しい人だったのだと、そう思ったら知らずの内に涙が零れていた。

二番目の義姉がした虐めなど、たいしたことはなかったのに、それ

を謝ってくれた。

内気なフェリシアにとって、それがどんなに勇気のいることだったか。

内気な人間でなくても、誰かに謝るといふのは、とても勇気のいることだ。

自身の内にある勇気をかき集めてでも謝ろうと思ってくれた、それだけでリーリアは十分だった。

「これを、リーリアに」

「これは……」

「お城の舞踏会の招待状よ……お母様は多分、あなたには渡してないと思うから……」

「……お義姉様」

「それからこれを、とても手荒れに効くそうよ、手を貸して？」

このぐらい掬って、手に揉み込むようにするので……一週間もすれば、治るそうよ

一週間後には舞踏会があるから、それまでに治してね

ドレスは、わたくしのを貸しますから、必ず後から来るのよ？

きつとね、あなたを救ってくださる方がいるから……」

「お義姉様、どうしてわたくしにそこまで……」

「だって、義理とは言え、あなたはわたくしの妹ではないの

わたくしね、ずっと妹が欲しかったの……妹が出来たらお姉さまがしてくださったように、

わたくしも妹のことを可愛がってあげたいってずっと思っていた

の  
「

二人は、穏やかに微笑みあつたのだつた。

## 後編

それからフェリシアは、舞踏会が開かれるまでの一週間の間、夜遅くにリーリアの部屋を訪れては、手荒れの薬を塗りこんでやり、次第に綺麗になってゆくその手を見つめて、自分の罪まで綺麗に消えて行くような、そんな奇妙な感じを味わっていた。

当日、一人で準備をしなくてはいけないフェリシアの為に、お化粧の仕方や髪の手入れ方を教えたり、ドレスの着方を教えたりしながら時は過ぎていった。

そして舞踏会当日――

「シンデレラ奇想譚 後編」

「では……シンデレラ、お前は留守番を頼みましたよ」

「はい、お義母様」

「レレイ、フェリシア、参りますよ」

「はい、お母様」

「……はい……」

チラチラと後ろを振り返りながら、フェリシアはリーリアのことが

心配でたまらなかった。

一人で来られるだろうか、その前にお化粧やドレスの着付けなど、一人で大丈夫だろうか。

心配で心配で、胃がキュウツと締め付けられる。

だが心配していても、自分はもう馬車に乗り込み出発してしまった。リーリアを幾ら心配しても、自分はもう何も出来ないのだから、と自分に言い聞かせ、外の景色に目をやった。

辺りはもう暗くなり始めた時間で、空はオレンジから紫のコントラストを描いている。

日が完全に落ちたら、舞踏会の始まり。

きっと自分は、誰とも踊れないだろうな……と、少し気分が落ち込んでしまう。

自分から声を掛けるなんてことは、フェリシアにはとても無理だし、華やかな場で顔を上げて真っ直ぐに前を見るなんてことも、とてもではないが無理。

（早く舞踏会なんか終わってしまえばいいのに……）

誰にも悟られないように心の中でそう願いつけるばかりだった。

その頃、シンデレラことリーリアは、姉から渡されたドレスに着替えていた。

だが、一人ではない。背後に一人の男がいる。

リーリアの背中に口づけを落としながら、ゆっくりと背中ボタンを留めていた。

「あ……駄目よ、舞踏会に遅れてしまうわ……」

「気にしなくていい、僕と一緒にだったと言えばいいのだから」

「もう……お義姉様に申し訳ないわ」

「君は悪い人だな」

「ふふっ……シンデレラか……本当のシンデレラは、誰なのかしらね？」

「少なくとも、リーリア……君ではないな  
何故なら君には、僕がいるから」

「そうね、私には小さい頃からあなたという婚約者がいるものね」

「愛しているよ、リーリア……さあ、僕がエスコートしてあげる  
城へ行こう、兄上もお待ちだ」

「ええ」

リーリアの微笑みは、妖しいまでに美しかった。

グレイバーク公爵一家が城に着き、フェリシアは早速顔を俯かせた。  
恥ずかしさと恐怖感で、顔を上げることは出来ない。

母は、義父の死亡に関わっているのでは？そう、宮廷で噂されていた。

そもそも高々子爵家の出戻り女が、公爵家に再び輿入れ出来たこと  
自体が、疑問だったのだ。

策略を疑われても仕方のないことだった。

だが母も姉も、そんなことはお構いなしと言わんばかりに、堂々と  
歩を進める。

「さあレレイ、フェリシア、お前たちの内どちらでも構わないわ  
王太子殿下かその弟殿下、どちらかのお心を射止めてくるのです  
よ」

「はい、お母様！わたくしに任せて！」

「……は、はい……」

一応、返事はしたものの、フェリシアは逃げ出す気満々だった。

姉のレレイがそそくさと王太子殿下を探しに行ってしまうと、フェリシアも早速、会場の隅っこへと逃げた。

なるべく入り口に近い位置を陣取り、リーリアが来たらすぐに分かるようにジツと入り口を見つめた。

（わたくしが……わたくしがリーリアを守ってあげなくては……）

どれくらいそうしていただろうか、やがて会場の扉が重く鈍い音を立てて開いた。

荘厳な彫り物が施されている立派な扉が開ききると、そこからこの世のものとは思えない、美しい娘が、男性のエスコートで入ってきた。

それは、リーリアだった。

（ど……どういうこと？あの方は誰？あの子は本当にリーリアなの？）

リーリアは、その美しい顔に妖しいまでの微笑を湛え、エスコートの男性に寄り添っていた。

今までは少女のように可憐な雰囲気的美少女だったのに対し、今のリーリアは、大人の女の色香を纏う、れっきとした「女」であった。

妖艶な美女が、フェリシアに気付いて妖しく微笑む。

それは、フェリシアが一度も見たことの無いリーリアだった。

「お義姉様！」

「り、リーリア……」

「お義姉様のお陰でほら、手はこんなに綺麗になりましたわ  
彼に嫌われなくて済みそうよ」

「そ、その方は……」

「ああ……わたくしの婚約者、第二王子のランドルフ殿下ですわ」

「っ……！お、王子殿下……そ、そんな……婚約者って……」

「フェリシア殿ですね、お初にお目にかかる

ランドルフ・レプス・オルハイムと申します

私の大切なリーリアが大変世話になったそうで……感謝いたします」

「ら……ランドルフ……？」

どこかで聞いた名前にフェリシアは、ハツとした。

あの図書館で会った男性、リーリアにと招待状をくれたあの男性の名は、ランドルフという名ではなかっただろうか？

その瞬間、フェリシアには全ての符号が結びついた。

これは、畏だったのだ。シンデレラと呼ばれた少女による、復讐のための畏だったのだと。

真っ青になりながら後退りし逃げようとするが、フェリシアの足は、

巧く動いてくれなかった。

ランドルフと名乗った王子が近づく、フェリシアは逃げる。だが、恐怖で身体が固まるフェリシアに対し、王子の身のこなしは軽やかなものだった。

あっという間に目の前に立たれ、ハンカチで口元を押さえられた。甘い匂いが鼻腔をつく。その瞬間、フェリシアの身体はランドルフに支えられるようにして崩折れた。

「……お義姉様、あなたに怨みは無いの」

「だが……フッフ……」

「悪い人ね、あなた方ご兄弟は……」

「君もね」

沈みゆく意識の中で、殺されるかもしれないとフェリシアは思った。母も、姉も、そして自分も。リーリアの大切な父親を奪ってしまった罪を、裁かれるのだと。

何故なら、フェリシアは知っていたからだ。

あの朝……義父が国王陛下と狩りに出掛ける当日の朝、自分の母が義父の馬の鞍に細工をしているのを、見てしまったのだ。

皮の部分に切れ込みを入れ黒く染めた糸で縫い付け、力を込めれば切れてしまうように細工しているのを。

義父が死んでしまったのは、事故でもなんでもない、母が殺したのだということ、リーリアは何処かで知ってしまった、

そして自分に復讐するために、あの図書館の男を近付かせたに違いないと思った。

だが、フェリシアはそれでも良かった。

リーリアに殺されるのなら、それは仕方の無いことなのだ。

浮遊感がなくなり、柔らかな何かに横たわらせられたと気付く。

今まで誰かに抱きかかえられていた所為か、ふわふわと浮遊感が続いていたのが急になくなったのに気付き、いよいよ自分は殺されてしまふのだと、フェリシアは覚悟を決めた。

だが、何時まで経っても何もされない。

頬を撫でる、大きな手のひらの感触ばかり。

「君が……ずっと欲しかった」

「フェリシア……ククツ……愛しい君が此処にいる、なんて素晴らしいんだろう……！」

「ああ……愛しているよ……君の全てを  
臆病なところも、気が弱くて内向的なところも、全て愛しているよ」

するりと、リボンが解かれる。

次第に肌寒く、自分が脱がされていると気付いてはいるのに、瞼が重くて目が開けない。

フェリシアは、別の恐怖に身を震わせた。

「ああ……思っていた通り、なんて美しい肢体だろうか……」

このハシバミ色の髪も、白磁のような白い肌も、果実のように豊かな胸……全てが理想通りだ」

「フェリシア……君は、私の后になるんだ……とても光栄なことなんだよ？」

君以外は愛さないと誓うよ……そして、君を苦しめるものは全て排除しよう

ああ、グレイバーク家のことは心配しなくてもいい、ちゃんと後釜は用意してあるからね……

君は何の心配もせず、ただ私の妻であればいい」

「君は……怒るかい？君を手に入れるために、君にまつわる全てを策略の渦へと巻き込んだことを」

男は、フェリシアの服を全て取り払い、身体中に口付けを落としながら己の罪を告白した。

だが男は、その罪による罰を受ける気持ちは、さらさら無かった。断罪される積もりも、無かった。

ただ愛しい女を手に入れるために、何もかもを巻き込んだ。

フェリシアは、ゆっくりと目を開ける。

琥珀の瞳が、次第に男を映し出す。フェリシアの瞳に映った男、それは、図書館で出逢ったあの男だった。

驚きにより、意識が一気に覚醒する。

そして、自分が裸にされていることに気付き、悲鳴を上げながらシートを掻き集め自身の身体を隠した。

「ああ、そんなに怯えないでくれ……私のシンデレラ」

「あ、あなたは……っ！」

「そう……ランドルフと名乗った男だよ、本当の名は……」

「マリオン・レゼル・オルハイム」

「お、王太子殿下……！？」

フェリシアの脳裏に、リーリアと本物のランドルフの姿が過ぎる。  
一連の何もかもが、フェリシアの中で繋がった。

リーリアは、自分を断罪するためにこんな茶番を仕組んだのではない、リーリアは黒幕ではない。

本当の黒幕は、今目の前にいるマリオンと名乗った男なのだと。

「ククッ……気付いたようだね、頭のいい女性は好きだよ……やは  
り君は、私の理想だ」

「な、なんのためにこんな……こんなことを……！」

「何のため？決まっている、君を手に入れるためさ！十年前……初  
めて君を目にした時、運命だと思ったよ

ウォルター伯爵に連れられて、初めて来た王宮に戸惑っていた君  
を見て、私は君を手に入れたと思った

でもウォルター伯が亡くなり、君は母君の実家である子爵家に戻  
ってしまった……運命を呪ったよ

子爵家では、王宮に呼ばれることも少ないし、舞踏会にも呼ばれ  
ない……

その時から、私の策略は始まった」

「で、では……お母様がグレイバーグ公爵様とご結婚されたのも……」

……」

「そう、私の薦めで結婚させた……グレイバーグは、私の弟の婚約  
者の父だからね

それに父上の幼馴染でもある、よく見知っていた

娘のために再婚しようと思っている、だがこんな年寄りに誰が妻  
となってくれようなんて悩んでいたから それなら出戻り女がいい

んじゃないかと薦めたんだ、そして君の母君の名を出した」

「……………」

「君の母上は、とても喜んでいたね……結婚式で神様に誓いを立てている時、彼女の心の奥底に眠る物に私は気付いていたよ、彼女は……本来、とても欲深な性質をしているとね

まさか公爵を殺害するような暴挙に出るとは思わなかったけど……余程、公爵家を自分のモノにしたかったのかな……フフフ……」

「ひ、酷い……！そ、そうやって人の人生までも弄んで……！か、神にでもなったおつもりですか！？」

「そうだね……君を手に入れるためなら、神にでも悪魔にでもなってみせるさ」

「っ……………！」

「さあ、お話の時間は終わりだ……これから私たちの初夜が始まるんだ、無粋なことはもうお止め  
そして、私に全てを委ねるんだ」

「ひっ……………！」

ベッドの上で追い詰められ、フェリシアはあっけなくマリオンに捕まってしまった。

左右の手首と足首を一括りに縛られ、フェリシアの秘められたそこは、マリオンに曝されてしまっている。

秘裂にそって指を這わせると、フェリシアは息を呑んだ。

未だ誰にも触られたことの無い部分に、自分でない男が触れている。そう考えるだけで、恐怖のどん底に突き落とされたようで、身体がカタカタと小刻みに震えた。

「そう怖がらなくていいんだよ？大事に……大事にしてあげるからね」

「や……やめ……っ……」

震えるフェリシアの頬を包みこみ、くちびるを重ねる。

マリオンは、舌を強めに無理矢理押し込み夢にまで見たフェリシアのくちびるを、丹念に味わった。

舌で歯列をなぞると、甘い吐息が漏れ、舌を絡ませあうと身体がピクリと反応する。

どちらとも言えぬ唾液が口端から零れ落ちて、くちづけは止まらなかった。

舌を吸い、くちびるを甘噛みし、口端から漏れた唾液を舐め取る。既に息も絶え絶えなフェリシアを見て、マリオンは自分の身体の奥からどんどん熱くなつてゆくを感じ、

早く彼女の中に入りたいという思いがマリオン自身を満たしていた。

「いや……いやです……お願いです……じゅ、純潔を奪うのはお止めになつて……！」

わ、わたくしは……わたくしは……純潔は夫となる方へ捧げたいのです……！」

「何を言っているんだい？君の夫となるのは、この私だ  
私以上に、君の夫として相応しい相手はいない」

「み、身分が違いすぎます……！幾ら母が公爵家へ嫁ぎ、わたくし自身も公爵家へ養子に入ったとしても、この身体に流れているのは、公爵家の血ではありません！」

「血がなんだというんだ？君の中に流れている血筋がどんなものだったのかまわない」

君は、グレイバーク公爵令嬢だ……誰がなんと言おうとね  
父王は既に私と君の婚姻を歓迎している、何せ……友人であったグレイバーク公爵の忘れ形見だからね」

「そんな……わたくしは……お義父様の血を引いてはいないのに……っ」

「血は繋がっていなくても、公爵は君達姉妹を分け隔てなく可愛がっていたよ……それは、君が何より知っているだろう？」

「……そ、それは……」

「さあ、お喋りはお終いだ……今宵、私達は夫婦になるのだ、君は妃殿下と呼ばれるようになる」

「いや……いやです、いや……いやぁ……っ」

フェリシアの柔らかな膨らみを、優しく……まるで壊れ物を扱うかのように優しく揉む。

その柔らかさを堪能しながらも、愛撫の手を止めようとはしない。  
くちびるで首筋に、鎖骨に、胸に、腹部に、足にたくさんくちづけを落とした。

くちづけを落とした部分には、赤い痕が……所有の証が散っていた。

まるで赤い花びらのような痕が真っ白な肌に残る度に、マリオンは満足気に口元を歪めた。

身体中に赤い痕を散らし、その様を見下ろして満足すると、そのくちびるはいよいよフェリシアの胸の飾り

を攻め立てた。口に含んで舌で転がすように弄る。フェリシアは、ただ声が出そうになるのを堪える事しか

出来ずにいた。マリオンが意地悪くニヤリと笑い、再び胸の飾りを攻め立てる。

指で摘ままれると、我慢していた声がついに出てしまい、羞恥で頬を真っ赤にした。

「それでいい、お前の可愛い声を聞かせてくれ」

「いや……っ」

「いやではない、声を出せフェリシア……お前の可愛い声を私に聞かせろ」

「ふぁっ……っ！」

両方の突起を一度に弄られ、溜まらずに声を上げ続ける。

「ああ……っ！」

「そうだ、それでいい……愛している、フェリシア……」

「お前はもう……私のものだ、私だけのフェリシア……」

その瞬間、フェリシアは己の中で凡てを諦めた。

この男の妻になる以外、道は無い。そうゆう風に道を限定されてしまった、その限定された道に誘導されて

しまったのだ。フェリシア自身だけでなく、義父も、母も、姉も、義妹とその婚約者さえも。

マリオン自身がその道に立ち、そこに立っているのがマリオンだと気付かれないように、多くのものを導き

、惑わせ、そして引き込んでいたのだ。

総ては、ただ格下の家柄に生まれた初恋の娘を、己の妻とするために。ただ、それだけの為に。

気の遠くなるような長い時間、フェリシアはただマリオンに抱かれ続けた。

両の目からポロポロと涙が零れ落ちる。

これが自分の運命だというのなら、決して幸運などではない、悲運だ。

幾ら相手が王太子と言えども、フェリシアは彼を愛してはいないのに、それでも妻になれと言うのだから。

一方通行の愛を押し付けられ、それを拒否することすら出来ず、ただその無意味な愛を受け入れるしかなかった。

フェリシアは思う。彼は、マリオンは心はいらないのかと。

身体だけが満たされれば満足なのかと。それならば、心は捨てよう。

今のこの場で、心を殺そう。

心を殺してしまえば、自分は自由になれるのではないか……

そしてフェリシアは……

「フェリシア……？」

「……………」

「フェリシア、フェリシア……」

マリオンが何度呼んでも、フェリシアは虚ろな目で虚空を見るばかり。

焦点の合わない琥珀の瞳が、ただ感情も無く、一粒の涙を流した。

それから数年後。

フェリシアの心は、あいも変わらず死んだまま蘇ることは無い。

マリオンが何度呼びかけても、リーリアが呼びかけても、フェリシアは返事一つ、頷くことすらしなかった

。フェリシアは、マリオンのもものになった翌年に子供を産んだが、その子供に声を掛けることもできない。

その子も大きくなり、言葉を解するようになって母親であるフェリシアに話しかけるが、子供の声にも反応

はしなかった。そこで初めて、マリオンは自分のしたことは間違いだったのだと気付いた。

もっと時間を掛け、互いを理解し、それから求婚すれば良かったのだろうか？

ふとそう思う瞬間に、フェリシアとの出会いが思い出される。

「おとうさま、おかあさまはいつぼくをだっこしてくれるの？」

「……エルネスト」

「ねえ、おとうさまあ」

「……………」

かつて愛した女性は、もういない。

そこにあるのは、愛した人の形を模した人形があるだけ。  
本当のシンデレラ……不幸な娘は、いったい誰だったのか。  
それは、失くしたフェリシアの心にあるものだったに違いない。

マリオンは、一粒の涙を零した。

人形の琥珀の瞳からも、涙が零れた。

そこには、物語のような幸せに暮らしましたという終わりは、存在しなかった。

あるのはただ、灰かぶりの人形だけ。

## 後編（後書き）

初めて書いたファンタジーがこれって…ああ、なんて暗いやつなんだ私。

こんな話を最後まで読んでくださって、ありがとうございます。  
あなたは神様です…！

- - - - -

10/8…王子の名前間違っていました…修正しました。すみません  
でしたーっ！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1774i/>

---

シンデレラ奇想譚

2010年11月29日07時35分発行